

[第7章]

# ご寄稿



# ご遺族・現地で被災された方より

---

## 山本磨珠さん

---

「美しさは正義」 弟の言葉

もし山に命があるのなら、その心臓にナイフを突き立てて殺してやりたい。

もし人の作った法律で山を裁く事ができるなら、この手で死刑執行下してやりたい。

けれども、あの日たくさんの命を奪った事など、すっかり忘れているかの様に

山は美しくあり続ける。

再捜索打ち切り後、ノートに書き殴った。

もし山に命があって、ナイフを突き立てて殺しても、

人の作った法律で、山を死刑にしたとしても、いなくなった人は還ってこない。

けれども、あの日たくさんの命を奪った事を後悔しているかの様に

水や空気を私たちに与え続けている。

山は美しくあり続ける。

娘が書き残した。はたと気づかされた。

甥と姪に生き方を示していた弟、共に成長し自分の道を歩み始めた。

両親は「夫婦とも御嶽山へ」と、

老いを感じてか亡き後の望みを託した。

時は流れる。

私は生かされている事に感謝し心美しく生きよう。

弟は心の中で生き続ける。

「美しさは正義」





## 秋山則行さん

---

平成26年10月2日は一人息子の26歳の誕生日でした。

彼は9月27日に免許証更新の為、赴任先から市川市の自宅に帰宅する予定でしたので、私達は山が噴火した事も彼が御嶽山に居た事も知りませんでした。更に彼がどのような服装で誰と行ったのかも解らず搜索願も出せず。実際は会社仲間9人で登り6人が犠牲に。遺体は30日に木曾福島に下り、誕生日に棺に入って帰宅しました。彼は寝ているかのように綺麗な顔でした。

しかし実際は灰まみれの身体を長野県警の方々が、現地で綺麗にして下さっていた事を後から知りました。山の知識皆無の仲間と気楽に遊びに行き、結果多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。登山が気楽なレジャーとして定着し、近年は老若男女多くの遭難者が増えておりますが、彼や山仲間も登る山の基礎知識や装備を揃え山へは謙虚に畏敬の念を持って登って欲しかったと後悔しています。

## 山田真奈美さん

---

私はその日、神奈川から来た従兄弟と木曾を観光しようと御嶽山に来ていました。

ロープウェイを降り景色を眺め、トレッキングをし始めていたときです。急に空が暗くなって黒いものがたくさん降ってきたのです。着ていた服やリュックは真っ黒になってしまい、何が起こったかわからないまま、ひたすら元来た道を小走りで引き返しました。真っ黒になりながらロープウェイ乗り場にやっとたどり着きました。「これ何なのですか？」と従業員の人達に聞いても首をかしげて知らん顔でした。ロープウェイの上窓に灰が降り積もり真っ暗になりました。噴煙をあげる山全体が見えたとき震えてきました。この日、私達のような怖い思いをした人も沢山いたはずですよ。戦後最悪の火山災害が起きてしまったのですから今後は非常事態が起きたとき、従業員がお客様を誘導したり、現状をすばやく把握して迅速な対応が常にできるような教育を徹底していただきたいと思います。

この記録集作成にあたり、長野県は平成30年9月26日から10月25日にかけてご遺族・行方不明の方のご家族および現地で被災された方のご寄稿を募集しました。本欄では応募のあったすべてのご寄稿を原文のまま掲載しました。